

# 史跡 斎宮跡

平成13年度現状変更緊急発掘調査報告

平成15(2003)年3月

明 和 町

# 序

史跡齋宮跡の史跡整備は、昭和57年度に齋王の森の東側から始まり、その後、毎年計画的に整備がなされ、現在、その面積は20ヘクタールを超えております。これら史跡公園を利用することで、多くの人に齋宮跡を知っていただき、親しんでいただけるようになりました。

今年は、いつきのみや歴史体験館や齋宮跡10分の1史跡全体模型、芝生広場などのある「齋宮跡歴史ロマン広場」が開園したことにより、幼稚園や小学校の遠足、ウォーキング大会などの各種大会、イベントの会場及び体験学習の場として広く利用していただいております。

なかでも、毎年6月に開催される齋王まつりは、第20回を迎えました。昭和58年に史跡公園「齋王の森」で極めて小さい規模で始められた齋王まつりが、県内外から53,000人の人々が集まる県内屈指のまつりに飛躍しました。また、10月には国史跡を有する市町村の文化財関係者が参集し、第37回全国史跡整備市町村協議会大会も開催され、齋宮跡の保護、保存、活用について見聞を深めていただきました。

このように史跡を訪れる人が年々増える中、3月には、「国史跡齋宮跡休憩所」も完成し、史跡を訪れた人が気軽に利用していただけるようになり、これまで以上に多くの方々に歴史に親しんでいただけることを期待いたします。

この報告書は、平成13年度に38件提出された申請の中で事前発掘調査が必要であった14件の結果についてまとめたものです。

現状変更に伴う調査は、第134-9次調査のように比較的まとまったものや浄化槽のような非常に小さなものなど規模は様々です。また、調査箇所は広い史跡内を点在しており、昭和54年から230件を数え、調査面積も約51,000㎡に及んでいます。これらは計画調査では得られない貴重な資料を与えてくれるものであり、成果の積み重ねが齋宮跡を解き明かすものと思っています。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力いただきました地元地権者のみなさま、また、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた齋宮歴史博物館調査研究グループの方々に対してここに厚くお礼申し上げます。

平成15(2003)年3月

三重県多気郡明和町

町長 木戸口 眞澄

# 例 言

- 1 本書は、平成13（2001）年度に明和町が実施した史跡斎宮跡の現状変更緊急発掘調査の結果をまとめたものである。
- 2 本書に掲載した調査のうち、第134-2・3・4・5・7・8・10次調査の9件は公共事業として事業者（明和町）が費用負担したが、それ以外については国庫および県費の補助金を受けて実施したものである。
- 3 調査は明和町が主体となり、斎宮歴史博物館および明和町斎宮跡課が現地調査を担当した。
- 4 調査地区名の表示方法（例；6AL8）については、『史跡斎宮跡平成13年度発掘調査概報』（斎宮歴史博物館 2003年）による。
- 5 遺構の実測は、旧国土座標第Ⅵ系に相当する座標系を用いて表現している。
- 6 遺構の時期区分については、『斎宮跡発掘調査報告』Ⅰ（斎宮歴史博物館 2001年）を基準とした。
- 7 遺構冒頭の略記号は見た目の形態から以下のように表記した。  
SA；柱列 SB；掘立柱建物 SD；溝 SE；井戸 SK；土坑 SF；焼土坑 SH；竪穴住居
- 8 遺物の実測図は実物の4分の1に縮小して表示した。
- 9 調査資料類は、斎宮歴史博物館で一括保管している。
- 10 本書の作成には、駒田利治・泉雄二・伊藤裕偉・水橋公恵（以上、斎宮歴史博物館調査研究グループ）および中野敦夫・瀬田敏彦（明和町斎宮跡課）があたった。

## 目 次

1	前 言	1
2	第134-1次調査	2
3	第134-2次調査	2
4	第134-3次調査	3
5	第134-4次調査	3
6	第134-5次調査	4
7	第134-6次調査	5
8	第134-7次調査	5
9	第134-8次調査	6
10	第134-9次調査	7
12	第134-10次調査	10
13	第134-11次調査	11
14	第134-12次調査	11
15	第134-13次調査	12
16	第134-14次調査	12
付編 1	史跡現状変更等許可申請	14
付編 2	斎宮跡第124-1次調査の自然科学分析	16

## 表・挿図目次

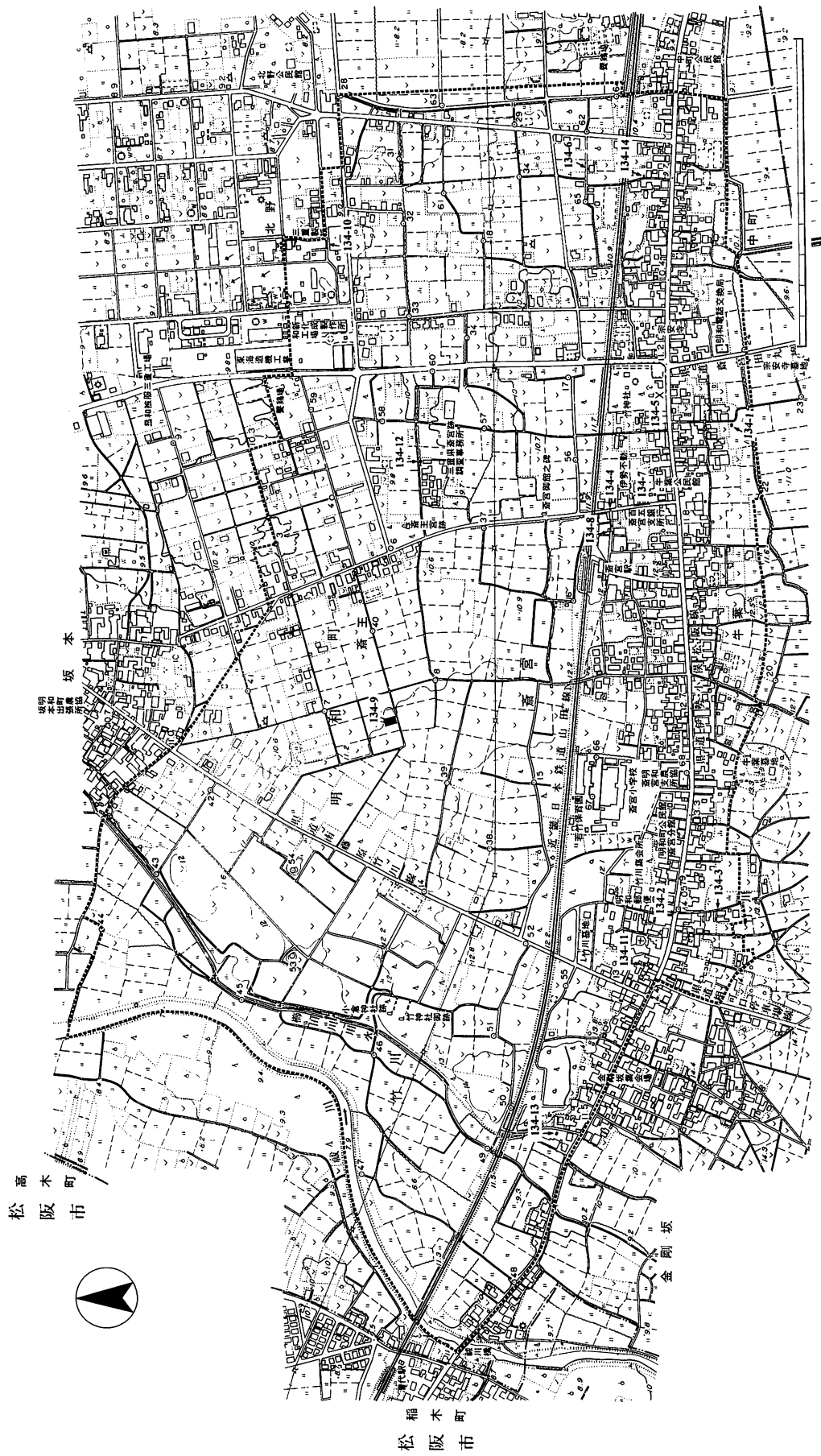
[表]	1	史跡現状変更等許可申請の推移	1
	2	第134-1～14次調査検出遺構一覧	13
	3	第134-9次調査出土遺物観察表	13
	4	平成13年度現状変更等許可申請一覧表	15
	5	花粉分析結果	17
	6	植物珪酸体分析結果	17

[図]	1	発掘調査地区位置図(1:10,000)	
	2	第134-1・5次調査 調査区位置図(1:2,500)	2
	3	〃 平面(1:200)・断面図(1:100)	2
	4	第134-2・3次調査 調査区位置図(1:2,500)	3
	5	第134-2次調査 平面(1:200)・断面図(1:100)	3
	6	第131-3次調査 平面図(1:200)	3
	7	第131-4次調査 平面(1:200)・断面図(1:100)	4
	8	第134-4・7・8次調査 調査区位置図(1:2,500)	4
	9	第134-6・14次調査 調査区位置図(1:2,500)	5
	10	第134-6次調査 平面(1:200)・断面図(1:100)	5
	11	第134-7次調査 平面(1:200)・断面図(1:100)	6
	12	第134-8次調査 平面(1:200)・断面図(1:100)	7
	13	第134-9次調査 調査区位置図(1:2,500)	8
	14	〃 遺構実測図(1:200)	8
	15	〃 遺物実測図(1:4)	9
	16	第134-10次調査 調査区位置図(1:2,500)	10
	17	第134-11次調査 調査区位置図(1:2,500)	11
	18	第134-12次調査 調査区位置図(1:2,500)	11
	19	第134-13次調査 調査区位置図(1:2,500)	11
	20	竪穴住居SB8101の植物珪酸体群集	17

## 写真図版

1	第134-1・4次調査	上：1次調査区全景(北から)	下：4次調査区全景(南から)
2	第134-6・7次調査	上：6次調査区全景(南から)	下：7次調査区全景(南から)
3	第134-8次調査	上：調査区風景(西から)	下：調査区近景(西から)
4	第134-8次調査	上：SH8479付近(西から)	下：SH8479西壁部分(南から)
5	第134-9次調査	上：全景(南から)	下：SH8490付近(西から)
6	第134-9次調査	上：SA8493ほか(南から)	下：SB8494ほか(北から)
7	第134-10・11次調査	上：10次調査区全景(東から)	下：11次調査区の状況(西から)
8	第134-12・14次調査	上：12次調査区全景(北から)	下：14次調査区全景(南から)
9	植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況写真		





第1図 発掘調査地区位置図 (1:10,000)

# 1 前 言

斎宮跡は平成13年度で史跡指定後23年を経過する。この間、例年50件程度の調査目的以外での現状変更許可申請が出されている。平成13年度は38件で、ほぼ例年並の件数であった。その内訳は道路・側溝改修、上水道の改修、個人住居の新築・増改築、農地の地盤改良などがある。

これらのうち、道路・側溝の改修や住宅増改築に関しては、申請者の理解を得て概ね遺構面に達しない工法により処置されている。その意味では史跡の保護はなされているといえるが、斎宮跡の場合、国民共有財産としての史跡という側面と、史跡内とはいえ住民の生活空間であるという側面が分かち難く結びついている。この両者いずれをも機能させることは至難の技ではあるが、より良い両立を目指すべく今後もさらに努力しなければならない。

また、史跡地内に下水道が完備されていないことに伴い、浄化槽の設置が数年来多く見られる。開発行為が遺構面まで達する事例は、近年ではこの事業が大部分を占める。浄化槽の設置個所については、近世参宮街道沿いの個人住宅に設置するケースが多い。ここは街道沿い集落に典型的な間口の狭い地割が連続する状況であることから、史跡保護を前提にしているとはいえ、その工事可能範囲は自ずと限定されてしまう。そのため、浄化槽設置に伴う調査は極めて限定された面積ではあるが、その調査記録はある意味計画調査以上に重要なものとなる。当該年度は、この浄化槽設置個所についても国土座標を取り付けることを原則として臨んだ。

平成13年度の開発に伴う史跡現状変更は、第134-9次調査があるために面積的には多くなっているが、いわゆる記録保存に該当する面積は少ない。これら小規模調査は、計画調査がほとんど実施されていない現況集落部分の状況をわずかでも知ることのできる貴重な事例でもあり、斎宮跡解明のための有効な資料として活用する努力を続ける必要がある。

なお、平成13年度からは斎宮の調査に際して地区名称を旧国土座標第Ⅵ系の100m角で大地区設定とする方法とした。30年来の調査積み重ねがあるために、地区割りの基準は平成14年4月から施行されている世界測地系2000ではなく、旧国土座標第Ⅵ系によるものとしているが、小規模調査の多い現状変更緊急調査についても斎宮全体で考察するための糸口となればと考える。(伊藤裕偉)

年 度	現状変更申請数	発掘調査件数	調査面積 (㎡)	補助金調査件数	同調査面積 (㎡)
S 54	33	17	3,968	12	996
55	60	12	1,281	10	815
56	53	12	5,416	10	696
57	50	8	657	7	577
58	52	16	3,757	10	1,440
59	30	15	2,884	12	1,589
60	39	8	1,260	5	1,014
61	54	12	1,845	9	1,507
62	57	16	2,854	13	1,620
63	46	17	8,820	7	1,131
H元	57	16	7,091	9	1,061
2	58	8	1,397	5	914
3	46	3	1,550	1	1,190
4	41	6	895	5	825
5	48	8	1,670	6	1,090
6	35	6	1,360	4	1,032
7	39	2	587	1	480
8	47	6	709	4	613
9	39	6	832	2	452
10	28	4	882	2	396
11	37	8	816	3	186
12	42	10	512	8	469
13	38	14	439	5	409
計	1,029	230	51,482	150	20,502

第1表 史跡現状変更許可申請の推移

## Ⅱ 調査報告

### 1 第134-1次調査（6 A Q14地区）

調査場所 多気郡明和町斎宮字鈴池313-1ほか1筆

原因 住宅新築

調査期間 平成13年9月13日

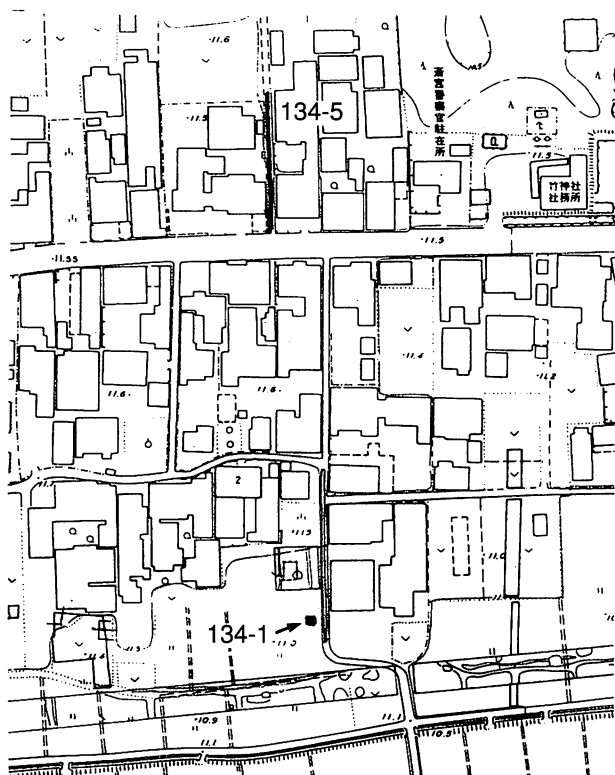
調査面積 3.4m<sup>2</sup>

1) 概況 調査地は、旧参宮街道南の住宅地にあたり、北北東約50mに竹神社（旧野々宮）が鎮座する。宅地造成前は水田で、現況はその上に盛り土がなされている。水田面の標高は約11.5mである。ここは史跡東部に展開する方格子割の鈴池西ブロック東端部にあたる。

2) 調査成果 標高約11.2mで黄褐色系粘土の地山に達する。遺構はこの面で確認でき、小規模なピットが2基確認されたにとどまる。出土遺物も微量で、平安時代後半頃と思われる土師器細片が見られたに過ぎない。

方格子割の単位ブロック内部のうち、道路側溝とされる遺構に近いほど他の遺構密度も薄いことが言われているが、当調査区もそれを裏付ける結果となった。

（泉・伊藤）



第2図 調査区位置図（134-1・5）（1：2,500）

### 2 第134-2次調査 （6 A I 13地区）

調査場所 多気郡明和町竹川字南裏地内

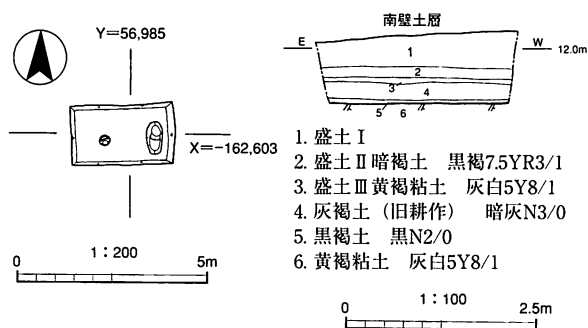
原因 水道改修工事（明和町）

調査期間 平成13年11月23日

調査面積 0.5m<sup>2</sup>

1) 概況 調査地は、史跡西南部の道路敷きに相当し、標高約14.1mである。今回の水道管仮設事業はアスファルト下約30cmで収まるため、遺構面に達する地点はほとんど無かった。しかし、本管（アスファルト下約70cm）との接続部分については、遺構面に達せざるを得なかった。そのような箇所のひとつが今回の調査区である。

2) 調査成果 この地点では、アスファルト下約60cm、標高では約13.4mで旧水田耕作土に達し、当地が以前は水田であったことを示している。その下部には黒褐色系土が堆積しており、微量の遺物を含



第3図 第134-1次調査 平面・断面図

んでいる。遺構は、標高約13.3mで確認された礫混じり暗黄褐色土上で、ピットおよび溝状の落ち込み（SZ8471）を確認している。出土遺物は少量で、溝状落ち込み内から時期の特定ができない土師器小片がある。（伊藤）

### 3 第134-3次調査 (6 A I 13地区)

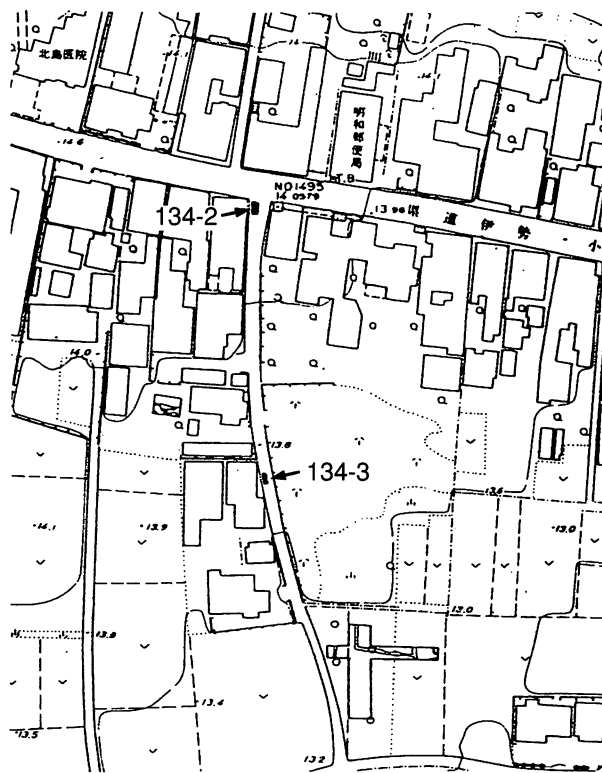
**調査場所** 多気郡明和町竹川字南裏地内  
**原因** 水道改修工事（明和町）  
**調査期間** 平成13年11月27日  
**調査面積** 1.2m<sup>2</sup>

- 1) **概況** 調査地は、旧参宮街道から南へ向かう道路上にあたる。道路面の標高は、約13.0mである。
- 2) **調査成果** 標高約12.2mで橙褐色系粘質土の地山に達する。隅丸方形の小穴（一辺30cm程度、深さ18cm）が1個検出され、土師器片が出土した。（水橋）

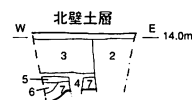
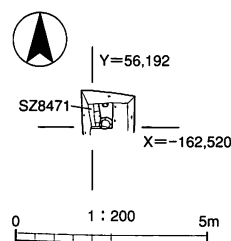
### 4 第134-4次調査 (6 A P 12地区)

**調査場所** 多気郡明和町斎宮字内山地内  
**原因** 仮設水道管理設等（明和町）  
**調査期間** 平成14年1月9日  
**調査面積** 2.0m<sup>2</sup>

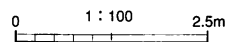
- 1) **概況** 第134-2次調査と同じく、水道管本管との接続のために遺構面に達することとなった調査である。近鉄斎宮駅から東に向かう道路がT字状に交差する地点で、現況は道路である。斎宮の方格地割では内山東ブロックと牛葉西ブロック間の道路相当部分にあたる。この調査に伴う工事は、現況排水路のU字溝下をくぐらせる必要のあった箇所である。



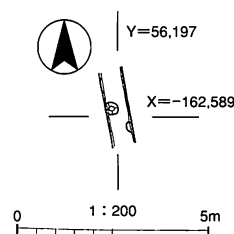
第4図 調査区位置図（134-2・3）（1：2500）



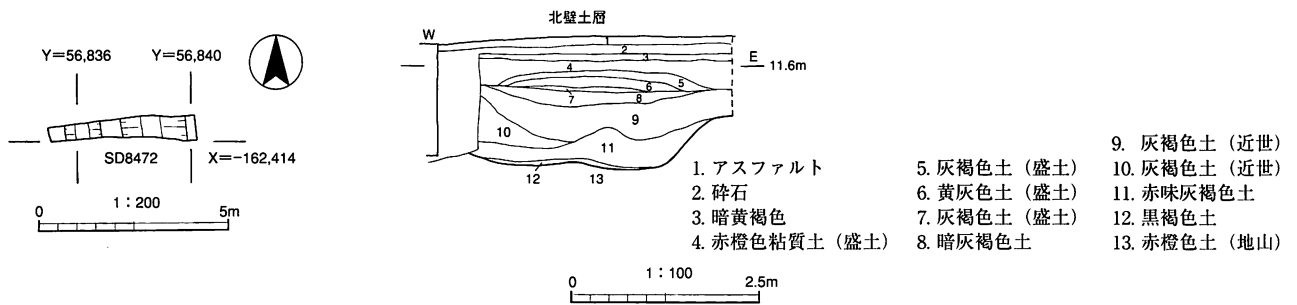
- |           |                   |
|-----------|-------------------|
| 1. アスファルト | 5. 旧耕土            |
| 2. 水道管理設坑 | 6. 灰褐色土           |
| 3. 碎石     | 7. 黒褐色土           |
| 4. 黄灰色砂礫土 | 8. 暗黄褐色土 礫まじり（地山） |



第5図 第134-2次調査 平面・断面図



第6図 第134-3次調査 平面図



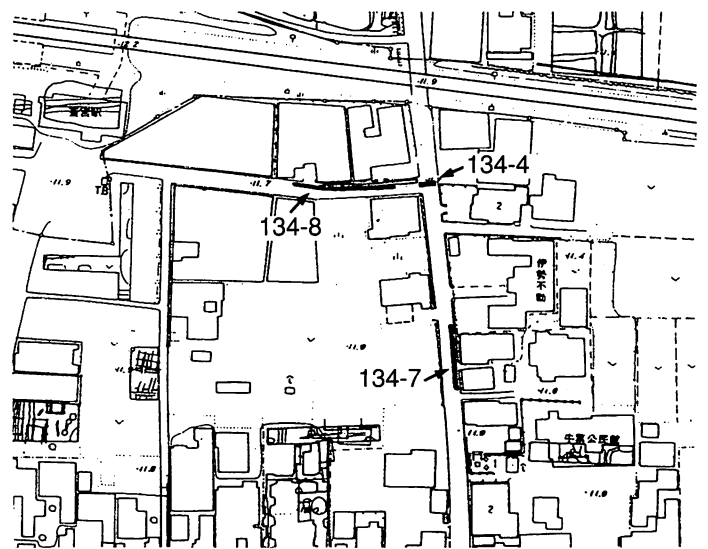
第7図 第134-4次調査 平面・断面図

2) 調査成果 標高約12.0mのアスファルト下約1.0m (標高約11.0m) で赤橙色土の地山に達する。この層を切り込む状態で、南北方向の溝SD8472が存在する。溝は遺構面から約65cm掘り込まれた比較的規模の大きいもので、検出範囲内底面中央部には若干の高まりが見られ、2条の溝とも考えられる。第7図第11層から平安時代末葉のロクロ土師器片が出土しているが、あまりにも遺物が少ないため、遺構の掘削・埋没時期を示すには至らない。

この溝とほぼ並行し、近世段階にも溝が掘られているようで、その段階での堆積土が第9・10層に相当する。この層からは近世の棧瓦が出土している。標高約11.3m付近の第7層以上は、数次に渡る道路盛土である。土層の状況から見ると、第6・7層、第5層、第4層、の3段階の道路が考えられ、最終的には第1～3層の段階でアスファルト敷きになる。第7～5層にかけては近世以降、おそらくは近代の道路で、幅約1間分の狭いものであったことが窺われる。

これらの遺構・遺物は、当調査地が方格地割道路敷想定位置であることを踏まえれば、古代の道路遺構消滅後も何らかの区画機能や道路としての利用が継続していたことを示すものと把握できよう。

(伊藤)



第8図 調査団位置図 (134-4・7・8) (1:2500)

## 5 第134-5次調査 (6 A Q13地区)

調査場所 多気郡明和町斎宮字牛葉地内

原因 仮設水道管理設等 (明和町)

調査期間 平成14年2月6日

調査面積 1.0m<sup>2</sup>

1) 概況 現在の竹神社の西にある南北方向の狭隘な通用道路敷きにあたる。アスファルト下約70cmに水道管本管を設置する工事に伴う調査である。標高は約11.6mである。斎宮の方格地割では、牛葉西ブロックと牛葉東ブロック間の道路相当部分のうち、やや牛葉西ブロックよりの場所にあたる。

2) 調査成果 遺構面を開削する場所は無く、ここでの遺構は把握されなかった。ただし、森下邸前の地点では、アスファルト下約80cm（標高約10.8m）で赤橙色粘土の地山に達する。地山直上には厚さ5cm内外の黒褐色土層、その上には厚さ約30cm内外の暗灰褐色土が堆積しており、遺物包含層に相当するものと思われる。その上部、アスファルト下約30cmで確認される層は旧表土と考えられ、道路敷きとなる以前は畑地であったものと考えられる。

暗灰褐色土層中から11～12世紀代のロクロ土師器片、およびその他の層から少量の土師器片が出土しているのみで、その量は多くない。 (伊藤)

## 6 第134-6次調査 (6 A U11地区)

調査場所 多気郡明和町斎宮字鍛冶山2363-2番地

原因 塀改修工事等

調査期間 平成14年1月16日

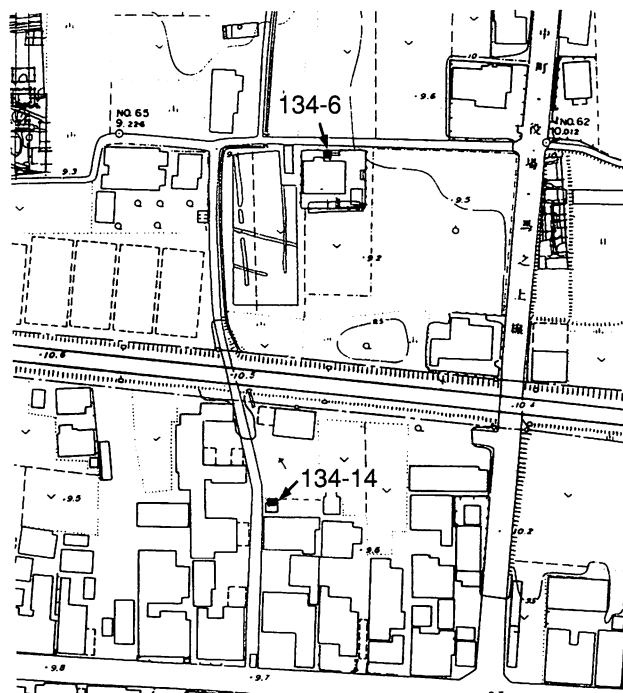
調査面積 2.2㎡

1) 概況 個人住宅の改修に伴い、遺構面に影響の及ぶ浄化槽設置部分の2.2㎡について調査を行った。現況は個人住宅敷地の一角で、標高は約10.0mである。斎宮の方格地割では、鍛冶山東ブロックの西端部分に相当する。

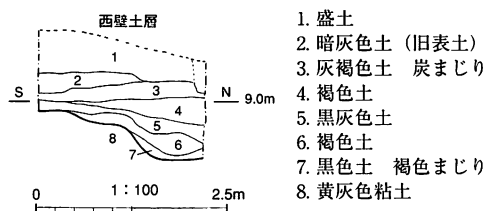
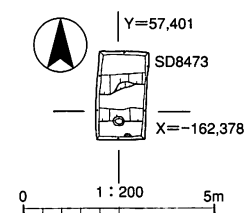
2) 調査成果 標高約9.4mで住宅地となる以前の旧表土（畑地）が見られる。標高約8.9mで黄灰色粘土の地山に達し、これが遺構面となる。遺構は、2基のピットと2段に落ち込む溝SD8473の南側法面を検出した。溝埋土内第6層には、藤澤良祐氏編年の尾張型第5型式並行の渥美産陶器椀（山茶椀）が含まれているが、全体的に出土遺物は少ない。

検出した溝は、現在住宅地北面に見られる東西方向道路に沿っているようで、この道路の前身は溝であったものと考えられる。

(伊藤)



第9図 調査区位置図 (134-6・14) (1:2500)



1. 盛土
2. 暗灰色土 (旧表土)
3. 灰褐色土 炭まじり
4. 褐色土
5. 黒灰色土
6. 褐色土
7. 黒色土 褐色まじり
8. 黄灰色粘土

第10図 第134-6次調査 平面・断面図

## 7 第134-7次調査

### (6 A P12地区)

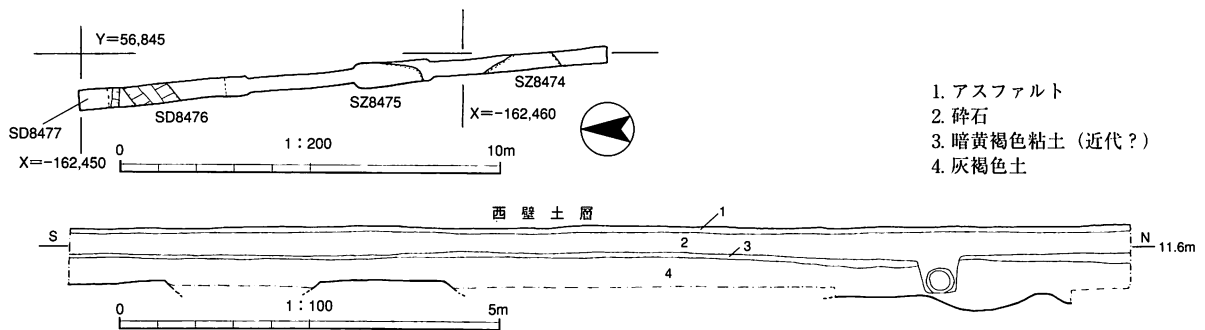
調査場所 多気郡明和町斎宮字牛葉地内

原因 仮設水道管理設等 (明和町)

調査期間 平成14年1月28日

調査面積 5.8㎡





第11図 第134-7次調査 平面・断面図

- 1) 概況 水道管本管の設置に伴う工事に際して調査を行った。調査位置はいつきのみや歴史体験館の東にある踏切から南に約70mの地点で、第134-4次調査区のやや南にあたる。現況は道路敷きで、標高は約11.9mである。
- 2) 調査成果 工事開削範囲と遺構確認面とがほぼ同じであったため、平面上確認したに止まるものが多い。標高約11.2m、アスファルト下約70cmで赤黄色粘土の地山に達し、これが遺構面となる。南北方向の溝ないしは土坑が2基 (SZ8474・8475) と、東西方向の溝2条 (SD8476・8477) が確認された。それぞれの遺構出土遺物には土師器小片があるのみで明確な時期は分からないが、いずれも近世の遺構である可能性が高い。(伊藤)

## 8 第134-8次調査 (6AP12地区)

調査場所 多気郡明和町斎宮字内山内

原因 仮設水道管理設等 (明和町)

調査期間 平成14年1月30日～31日

調査面積 10.8m<sup>2</sup>

- 1) 概況 水道管本管の設置に伴う工事に際して調査を行った。現況は道路敷きで、近鉄斎宮駅から東に向かう通用道路にあたる。標高は約11.7mである。平成9年度に実施された第123-4次調査に隣接する。また、今年度を実施した第134-4次調査区の延長線上にあたる調査区である。斎宮の方格地割では、内山東ブロックの北半部に相当する位置である。
- 2) 調査成果 工事開削範囲が遺構確認面以下に及ぶ範囲があり、その部分について立会調査を行った。標高約11.2～11.3m、アスファルト下約50cm内外で赤黄色粘土の地山に達し、これが遺構面となる。遺構面上には10～20cm内外の遺物包含層が堆積しているが、これも純粹なものではなく、中世以降の攪拌を伴っていると考えられる。遺物包含層上には、近世～近代にかけての道路敷盛土がみられ、その上部が現在の道路面 (砕石+アスファルト) である。確認した遺構は柱列SA8678、竪穴住居SB8479、土坑SK8481、ピットのほか、近世～近代の焼土坑SF8482がある。

柱列SA8478は柱間約2.1mで東西方向に2間分を確認した。北軸基準で見た方位はN1°Eである。出土遺物は少量であるが、平安時代後期以降のものと考えられる。西側柱間の包含層中からは緑釉陶器が1片出土している。

竪穴住居SB8479は、東西幅2.5mで方形のものと考えられる。遺構検出面からの遺存は約10cmで

ある。壁周溝が良好であり、また、貼床も確認されたため、竪穴住居と判断してよい。埋土中からは奈良時代後期～末期頃の土師器・須恵器が出土している。

焼土坑SF8482は、一部青灰色を呈して極めて硬質に焼き締まっている。内部には近世～近代の棧瓦が多量に認められた。ロストル等は確認できなかったが、瓦窯（ダルマ窯）である可能性が高い。近隣での聞き取りによると、太平洋戦争前頃までこの付近に瓦工房が存在していたとのことである。

(伊藤)

## 9 第134-9次調査 (6AL8・M8)

調査場所 多気郡明和町斎宮字塚山3322-2

原因 表土入替

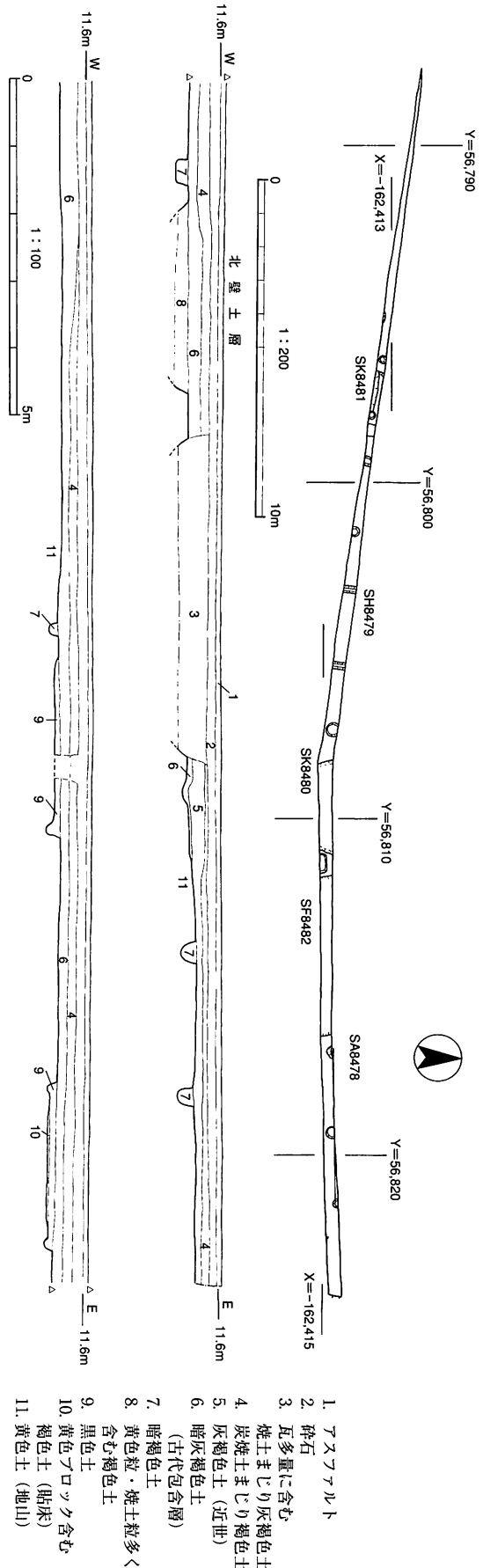
調査期間 平成14年2月11日～3月22日

調査面積 390m<sup>2</sup>

1) 概況 今回の調査区は、史跡西部の塚山古墳群の南西に位置する。周辺では、第32・33次調査(昭和55年度)、第50次調査(昭和58年度)、第87次調査(平成2年度)などの面的な計画調査も行なわれているが、多くは隣接して実施されている第70-1次調査(昭和62年度)などの現状変更に伴う小規模な調査が多い。第70-1次調査では、斎宮第I期第2段階(奈良時代前期)の掘立柱建物のほか、同時期の基準資料となっているSK5102が調査されている。

当該地区は、塚山古墳群の東端部にあたり、古墳の周溝が確認されている調査区もある。また、古里地区をはじめ史跡の西部地域は、飛鳥時代から奈良時代の遺構が集中する地域でもあり、鎌倉時代以降の中世墓の調査事例もこの地区周辺に多い。

2) 調査成果 調査地は、標高11.1mの畑地である。基本層序は、第I層が暗褐色砂質土(耕作土)の表土、第II層が黒褐色粘質土となり、第II層下に部分的であるが第III層の黒褐色粘質土(黒ボク)が認められ、におい黄褐色粘土層及び基盤層である砂礫層が露呈する第IV層となり、遺構の確認は第IV層上面



第12図 第134-8次調査 平面・断面図

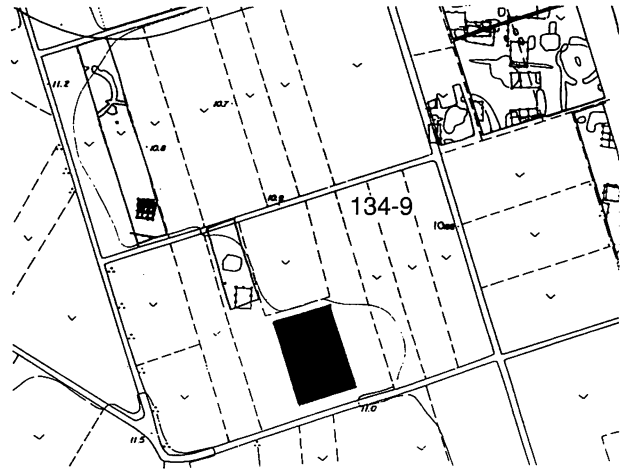
で行い、標高は10.3 m前後である。

a) 遺構 奈良時代の竪穴住居1棟、掘立柱建物3棟、柱列1条、土坑3基、及び時期不明の溝4条等を確認している。

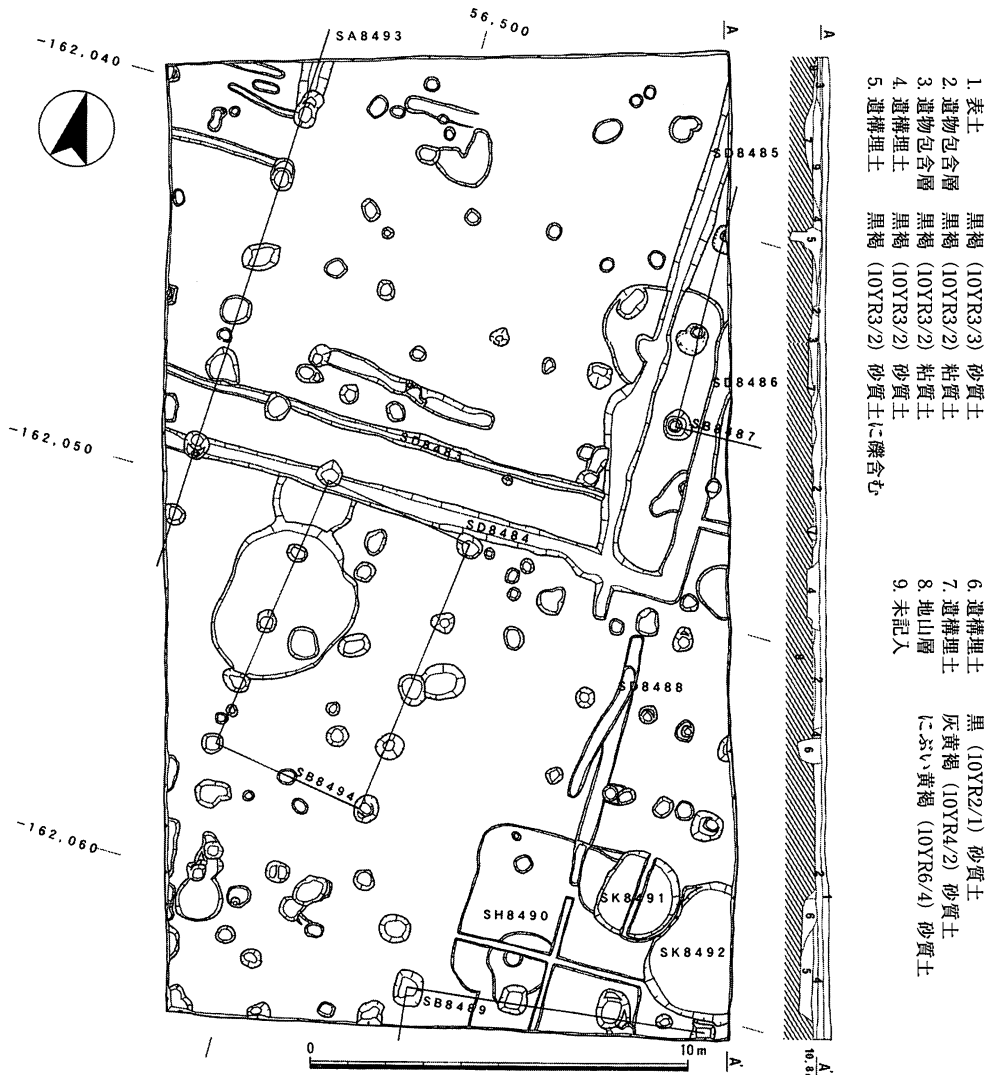
竪穴住居SH 8490は、調査区の南東隅で確認したものであり、SB8489・SK 8491・8492と重複するが、最も古い。南北方向で4.6m、東西方向に3.8m以上の規模をもち、ほぼ隅丸方形をなすものと考えられ、棟方向は、E0°Nとなる。確認面からの深さは、数cmと保存状況は良くない。

掘立柱建物は、SB8494以外の2棟は側柱の柱穴のみの確認であり、建物跡と断定はできないが、掘形及び柱痕跡を有することから建物の可能性が高いと判断している。

SB8494は、北側妻柱中央が確認できなかったが、桁行4間(7.6m)、梁行2間(4.2m)の南北棟建物である。柱間は、桁行で北から2.0m+2.0m+1.8m+1.8m、梁行は1.8m等間で、棟方向はN8°Eである。柱穴からの出土遺物は、土師器・須恵器片である。



第13図 調査区位置図 (134-9) (1 : 2500)



第14図 第134-9次調査 遺構実測図 (1 : 200)

SB8487は、調査区北東端で確認したもので、N6°E方向に柱間2.6m等間で、柱掘形が約0.7mの略方形を示す柱穴3穴を確認し、約0.3mの柱痕跡も確認した。

SB8489は、調査区の南東部でSB8490とSK8492と重複して検出し、SB8490よりも新しく、SK8492よりも古い。北側柱3間を確認しているが、建物は東及び南に拡がると推定される。柱掘形は、南北方向に長い0.7~0.9mの方形であり、柱痕跡は確認できなかった。側柱の方向は、E6°Sである。

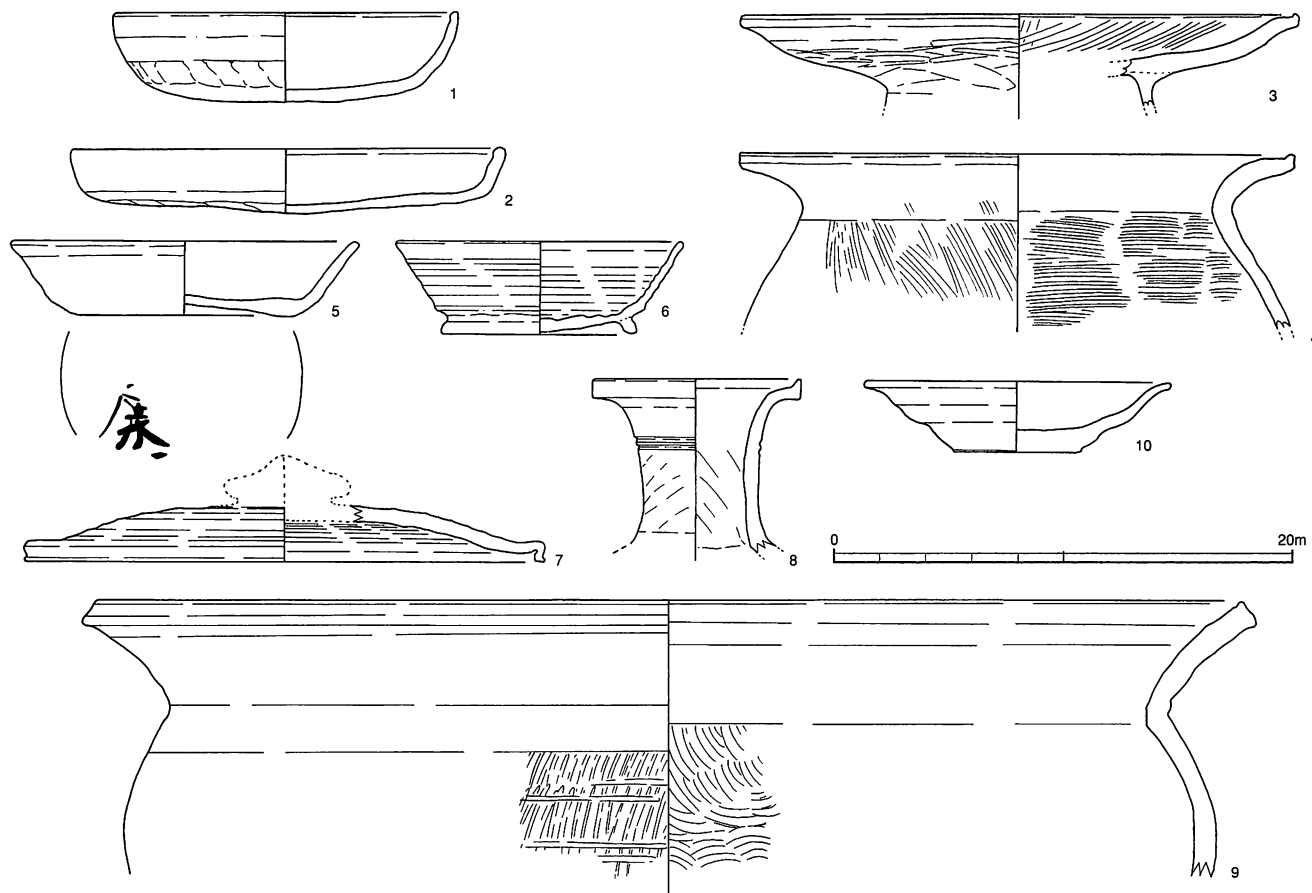
柱列SA8493は、調査区の北西部で検出したものであり、N3°Eの方向で、柱間1.8~2.1mで5間（北から1.8m+2.1m+3.0m+2.1m+2.1m）を確認した。柱掘形は、約0.6~1.0mで不揃いであり、柱痕跡も確認できなかったが、この柱列周辺では基盤層である砂礫層が露頭しており、柱穴はこの砂礫層を掘り込んでおり、柱穴と判断した。

SK8491は、調査区南東部でSH8490、SK8492と重複して検出され、この中で最も新しい。径約2.3m、深さ約0.2mで、暗褐色粘質土を埋土とする。須恵器杯(6)が出土。

SK8492は、調査区南東部でSB8490、SB8489、SK8491と重複して検出され、SB8489・SH8490よりも新しく、SK8491よりも古い。土坑の東部分は調査区外へ拡がるが、径約3.6mで、深さは約0.4mである。土師器台付皿(皿B)(3)と須恵器杯蓋(7)が出土。

溝SD8483~8486は、ほぼ東西及び南北に延びる溝群であり、時期も同時期のものと考えられる。SD8483とSD8484は、幅0.5m前後で、深さ0.1mと同規模であり、溝芯々間が約1.8mで併行して東西に延びることから、道路側溝と考えられる。なおSD8484は、調査区東端でSD8486と直交する。

SD8485とSD8486は、幅約0.7m、深さ約0.2mと前者の溝よりもやや規模が大きいが、SD8485とSD8486間の溝芯々間は、前者同様1.8mであり、調査区東端で直交することから、区画を介する道路と側溝と考えられる。SD8483は、更に東へ延び、SD8487は、南側のSD8488に繋がる可能性もある。



第15図 第134-9次調査 遺物実測図 (1:4)

SB8490の北及び西側には、柱穴と考えられるピット群も確認しているが、明確に建物と確定するにはいたらなかった。L8-c13pit3から須恵器長頸壺(8)、L8-x11pit2から陶器小椀(10)が出土。

b) 遺物 整理箱で20箱の遺物が出土しており、土師器、須恵器、陶磁器のほか鉄釘等の金属製品がある。遺構出土で図示し得る遺物は少なく、SK8492出土の土師器高杯(3)と須恵器杯蓋(7)、SK8491出土の(6)等がある。全体に斎宮第Ⅱ期(平安時代前半期)の土器類が主体をなし、鎌倉時代の陶器類も出土している。

**SK8492出土土器** 土師器台付皿(3)は、杯部と脚接合部の破片であり、推定口径22.2cmで、浅い杯部はわずかに内弯して開き、口縁部は外反し、端部は内側につまみ出され、上方に面をもつ。脚部は、杯部に貼り付けられ、器壁も薄い。杯部外面は粗くヘラミガキ調整され、内面には一段の粗い斜放射状暗文を施す。須恵器蓋(7)は、口径16.8cmで扁平な体部はわずかに内弯して、口縁端部が垂直気味に下方に引き出され、接地部に面をもつ。天井部には、擬宝珠形のつまみがつくものと考えられる。須恵器の形態と台付皿のヘラミガキから、斎宮第Ⅱ期第1段階に属するものである。

**SK8491出土土器** 須恵器杯B(6)は、口縁部が直線的に外傾して開き、断面長方形の高台が外側に開いて貼り付けられる。

**その他の土器** 須恵器杯A(5)は、調査区西側でSD8483と重複するピットから出土したものであり、底部外面に「糜」「廉」「廩」等とも読める漢字一字の墨書が認められる。

小椀(10)は、口径13.3cm、器高3.1cmで平底の底部に大きく開く口縁部をもち、口縁端部は外反する。口縁部はロクロナデ調整し、底部外面に糸切り痕を止める。胎土に長石を含み、暗褐色を呈する。技法的には、須恵器の製作技法を踏襲し、器形は灰釉陶器の椀形態をなし、斎宮第Ⅲ期に属するものと考えられる。その他の土器は斎宮第Ⅱ期第1～2段階のものと考えられる。

3) まとめ 第134-9次調査区内では、竪穴住居以外の明確な遺構を確認することができなかったが、調査区北に隣接する第70-1次調査或いは第65-1次調査では、斎宮第Ⅰ期の奈良時代の竪穴住居及び掘立柱建物が確認されており、斎宮成立段階における遺構の拡がりを認めることができる。斎王宮殿との関係は、今後の竪穴住居や掘立柱建物・柵等の広範囲な検討を行う必要がある。また、東西南北に延びる溝群は、方格地割や現行地割とは異なる地割りが存在したことを裏付けている。(駒田)

## 10 第134-10次調査

### (6 A T 7 地区)

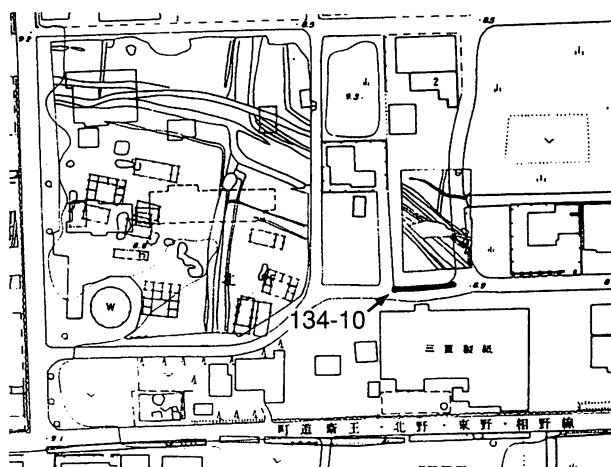
調査場所 多気郡明和町斎宮字東前沖3554

原因 側溝新設(明和町)

調査期間 平成13年4月22日

調査面積 9.0m<sup>2</sup>

1) 概況 調査地は、史跡北東端部にあたる。標高約8.9mである。すぐ北で実施された第37-4、117-5、131-6次調査区では、史跡北部をめぐる「鎌倉大溝」が検出されている。側溝の新設事業に伴い、U字溝設置にかかる開削範囲内を事前調査した。現況は道路敷き路側帯部分



第16図 調査区位置図(134-10)(1:2500)

である。開削範囲は地表面から約50cmである。

2) 調査成果 開削範囲内は全て近代の攪乱が入っており、その埋土内で掘削が終了した。そのため、遺構・遺物ともに認められなかった。(伊藤)

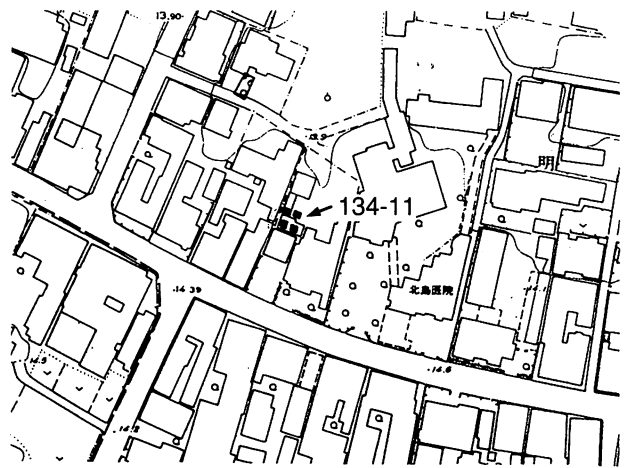
## 11 第134-11次調査 (6 A I 12地区)

調査場所 多気郡明和町竹川字東裏354-1

原因 住宅増築

調査期間 平成13年9月17・18日

調査面積 4.0m<sup>2</sup>



第17図 調査区位置図 (134-11) (1:2500)

1) 概況 調査地は、旧参宮街道北の住宅地にあたる。住宅増築のため、1m<sup>2</sup>の基礎4箇所を調査した。

2) 調査成果 調査は、現地表面から80cmの深さまで人力掘削で行った。近世以降の盛土・攪乱内でおさまり、遺構・遺物は確認されなかった。(水橋)

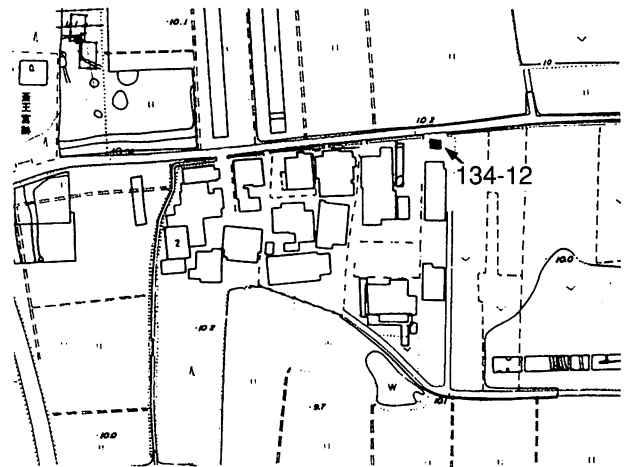
## 12 第134-12次調査 (6 A P 9地区)

調査場所 多気郡明和町斎宮字下園2926-16番地

原因 浄化槽設置

調査期間 平成14年2月5日

調査面積 3.4m<sup>2</sup>



第18図 調査区位置図 (134-12) (1:2500)

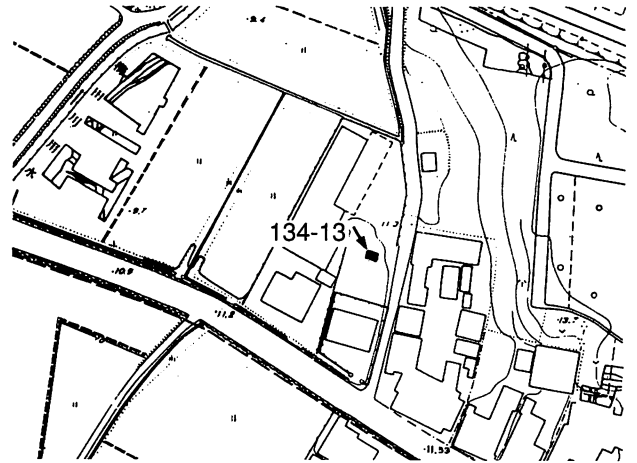
1) 概況 調査地は、史跡中央部にある「斎王の森」からやや東にあたる位置である。標高約10.2mである。個人住宅の浄化槽設置に伴い、その開削範囲内を立会調査した。現況は個人住宅の敷地内で、盛り土がなされている。近隣では住宅新築に伴う発掘調査(第76-16次調査)が実施されている。

2) 調査成果 調査地は、表土下約110cmで地山(段丘礫層、礫混じり黄色粘土)に達するが、近隣の調査事例と比較して深く、また確認した土層もブロック土を含有するものであることから、土取などに伴う攪乱範囲内と考えられる。遺物は、藤澤良祐氏による編年の尾張系第5型式相当の山茶碗片が出土したのみである。(伊藤)



## 13 第134-13次調査 (6 A F 11地区)

調査場所 多気郡明和町竹川字花園659-5番地  
原因 住宅建設  
調査期間 平成14年2月25日  
調査面積 2.7m<sup>2</sup>



第19図 調査区位置図 (134-13) (1:2500)

1) 概況 調査地は、史跡西部の祓川が形成した沖積地に相当する。個人住宅の浄化槽設置に伴い、その開削範囲内を立会調査した。現況は個人住宅の敷地内で、盛り土がなされている。現在の標高は約11.3mである。

2) 調査成果 工事掘削深度(表土下約120m)まで、全て盛り土内であり、基底部付近で旧表土に達したにとどまる。したがって、今回の工事では遺構面まで達していない。出土遺物も無かった。

(伊藤)

## 14 第134-14次調査 (6 A U 12地区)

調査場所 多気郡明和町斎宮字笛川2359番地  
原因 住宅改築  
調査期間 平成14年3月4日  
調査面積 3.5m<sup>2</sup>

1) 概況 調査地は、史跡東部の旧参宮街道からやや北に入った場所にあたる。個人住宅の浄化槽設置に伴い、その開削範囲内を立会調査した。現況は個人住宅の敷地内で、盛り土がなされている。現在の標高は約9.5mである。ここは、斎宮跡方格地割のうち、鍛冶山中・鍛冶山東・中西東・笛川の4ブロック交点道路敷きに相当する場所である。

2) 調査成果 調査地は、表土下約60cmで地山(段丘礫層、礫多い暗橙色土)に達する。この層を検出面として精査したが、遺構は認められなかった。なお、地山上には比較的安定した暗褐色土が堆積しており、遺物の包含があってもよさそうであるが、出土しなかった。

調査地で遺構・遺物の見られない状況は、ここが方格地割道路交点に相当することに関連すると見られる。近隣での調査事例はあまり無いが、埋土の状況を見る限り遺構密度は高くないと想定される。方格地割形成以前のこの付近は、史跡西部とは対照的に、ほとんど土地利用がなされなかったとも考えられる。

(伊藤)

通番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	斎宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SZ8471	溝か落ち込み	134-2	溝 1	I13		不明		出土遺物少量につき、特定不可
SD8472	大溝	134-4	溝 1	P12		平安末?		南北方向の大溝、2条分?
SD8473	溝	134-6	溝 1	U11		鎌倉		東西方向の溝
SZ8474	溝か土坑	134-7		P12		近世?		南北方向の溝か土坑
SZ8475	溝か土坑	134-7		P12		近世?		南北方向の溝か土坑
SD8476	溝	134-7		P12		近世?		東西方向の溝
SD8477	溝	134-7		P12		近世?		東西方向の溝
SA8488	柱列	134-8		P12		平安末?		2間分(4.7m)、東西方向の柱列
SH8479	竪穴住居	134-8	竪穴 1	P12		奈良		壁周溝あり
SK8480	土坑	134-8	土坑 1	P12		奈良・平安		
SK8481	土坑	134-8	土坑 3	P12		平安後期~	Ⅲ	
SF8482	瓦窯	134-8		P12		江戸後期		ダルマ窯と考えられる。
SD8483	溝	134-9	溝 4	L8				
SD8484	溝	134-9	溝 5	L8				
SD8485	溝	134-9	溝 6	L8				
SK8486	土坑	134-9	土坑 4	L8	c14			
SB8487	掘立柱建物	134-9		L8		奈良?		
SD8488	溝	134-9		L8				
SB8489	掘立柱建物	134-9		L8		奈良?		SK8492より古
SH8490	竪穴住居	134-9	土坑 3	L8	y13	奈良?		SK8491より古
SK8491	土坑	134-9	土坑 1・5	L8	b11	奈良後期?	Ⅱ	SH8490・SK8492より新
SK8492	土坑	134-9	土坑 4	L8	c12	奈良後期?	Ⅱ-1	SB8489・SH8490より新、SK8491より古
SA8493	柱列	134-9		L8		奈良?		
SB8494	掘立柱建物	134-9		L8		奈良?		

第2表 第134-1~14次調査 検出遺構一覧

No	出土遺構	器種	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録No
1	L8-a15 包含層	土師器 杯	口径 15.0	口~体外:ヨコナデ、底外:オサエナデ、 内:剥離	密	良	橙5YR7/8	口1/6		001-04
2	不明 包含層	土師器 皿	口径 18.9	外:ナデ・底部ケズリ、 内:ナデ	粗 1mm程 粒含	やや 軟	橙7.5YR7/6	口9/10		002-02
3	L8-c14 SK8492	土師器 台付皿	口径 24.1	体外:ナデ・ミガキ 内:ナデ・斜放射状暗文	密	良	橙5YR6/6	高台 1/10		002-05
4	L8-y11 包含層	土師器 甕	口径 24.0	外:ハケメ・ヨコナデ 内:ハケメ・ヨコナデ	粗	良	淡黄橙7.5YR8/3	口1/4		002-01
5	L8-y12 pit 1	須恵器 杯	口径 15.2	外:回転ナデ、底部乱ナデ 内:回転ナデ	密	堅緻	灰 N5/1	口1/2	底部外面に墨書「廉」?	001-01
6	L8-c14 SK8491	須恵器 杯	口径 12.5	外:回転ナデ、回転ケズリ、高台貼付ナデ 内:回転ナデ	密	堅緻	灰 7.5Y5/1	口1/4		001-03
7	L8-c14 SK8492	須恵器 杯蓋	口径 22.6	外:回転ナデ 内:回転ナデ	密	堅緻	灰 5Y7/1	口1/4		001-02
8	L8-c13 pit3	須恵器 長頸壺	口径 9.2	外:回転ナデ、沈線 内:回転ナデ 内外面ともにシボ目痕が残る	密	堅緻	灰 N4/0	口2/3		002-04
9	L8-c14 包含層	須恵器 甕	口径 50.8	外:平行タタキメ、ナデ、回転ナデ 内:同心円当て具痕、回転ナデ	密	堅緻	にぶい黄 2.5Y6/3	口3/5		003-01
10	L8-x11 pit 2	陶器 皿	口径 13.2	外:回転ナデ、糸切り 内:回転ナデ	密	堅緻	にぶい黄橙 10YR6/6	口2/3		002-03

第3表 第134-9次調査出土遺物観察表

## 付篇 1 史跡現状変更等許可申請

平成13年度中の史跡現状変更等許可申請は、38件提出された。このうち発掘調査を行ったのは、史跡の実態解明のための計画発掘調査が3件、個人や公共事業の現状変更に伴うものが14件(うち第134-1次、第134-10次調査は前年度申請分)あった。

そのほかの23件については、宅地敷地内における個人住宅の建設など小規模であったり、工事が簡易で地下遺構に影響を及ぼさないものである。なお、基礎掘削工事にあたっては齋宮歴史博物館並びに明和町齋宮跡課職員の立会いを実施している。

13年度の申請の内容は、第4表のとおりであり、これらの申請を(A)個人等から申請されるもの、(B)公共機関等による地域の生活環境整備に伴うもの、(C)史跡環境整備および維持管理等に伴うもの、(D)史跡実態解明のための計画発掘調査実施の申請に分けることができる。

### (A) 個人等による申請

個人等による申請は24件あった。そのうち事前の発掘調査が必要であったのは7件で、その内容は個人住宅等の新築及び改築(第134-3、6、11、12、13、14次調査)が6件、農地の表土入替(第134-9次調査)である。

他の17件については、個人住宅の建設や除去で土地利用区分の第四種保存地区にあたり、工事立会い等の条件付許可により、史跡に影響を及ぼすことなく施工している。

### (B) 公共機関等による地域の生活環境整備に伴う申請

この申請は9件の提出があった。その内容は、既設道路の舗装や水道管の改修等が5件、電柱等の新設が2件、自治会の掲示板の移設、高圧線維持管理に伴う樹木伐採などである。この内調査対象となったものは、上水道管理設に伴う第134-2～5次調査、第134-7～8次調査の6件で、そのほかは工事立会いで着工している。

### (C) 史跡環境整備および維持管理等に伴う申請

史跡の整備及び活用に伴う申請は2件あった。その内容は、史跡齋宮跡の見学者対策に伴う散策道のカラー舗装等である。

### (D) 計画発掘調査のための申請

これは、三重県教育委員会が主体となり、齋宮歴史博物館が実施しているもので、3件の申請が提出され3,020㎡が調査された。これらの内容については齋宮歴史博物館から別途調査概報が刊行されている。

(中野敦夫)

第4表 平成13年度 現状変更等許可申請一覧表

	申請地	種別	申請者	変更内容	申請日	許可日	変更面積	区分	備考
1	竹川字中垣内439-5・446-1	D	三重県教育委員会	発掘(計画)調査	13.5.7	13.6.15	750㎡	2	第132次調査
2	竹川字中垣内地内	B	明和町(建設課)	町道のオーバーレイ	13.4.27	13.5.28	118m	2	
3	斎宮字上園3121ほか5筆	D	三重県教育委員会	発掘(計画)調査	13.6.11	13.7.6	1,330㎡	1	第135次調査
4	斎宮字西加座地内	B	明和町(建設課)	町道の舗装	13.6.7	13.7.11	L=79m	2	
5	斎宮字牛葉地内	B	三重県(松阪地方 県民局建設部)	県道舗装修繕	13.6.13	13.7.11	L=142m	3	
6	斎宮字西加座2671、 2671-1	A	七林勝之	建物除去	13.6.15	13.8.14	96.19㎡	4	
7	斎宮字西加座2673-2	C	明和町(斎宮跡課)	既設側溝の部分改修	13.6.18	13.7.11	2ヶ所	1	
8	斎宮字西加座2713ほか2筆	D	三重県教育委員会	発掘(計画)調査	13.7.13	13.8.14	910㎡	2	第133次調査
9	竹川字東裏354-1	A	鈴木正己	住宅増築	13.7.12	13.8.30	23.01㎡	4	第134-11次調査
10	斎宮字中西2399-2	A	野中芳明	住宅改築	13.7.5	13.8.30	40.18㎡	4	
11	斎宮字牛葉572-2	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱新設	13.7.31	13.8.31	1本	4	
12	竹川字南裏233-1ほか3筆	A	鈴木正己	住宅除去	13.8.8	13.9.21	431.98㎡	4	
13	竹川字南裏240	A	寺西弘行	住宅改築	13.8.13	13.9.21	97.20㎡	4	
14	斎宮字西加座2678-2	B	中部電力株式会社 松阪営業所	電柱支線新設	13.8.14	13.9.11	1か所	4	
15	竹川字南裏地内	B	明和町(上下水道課)	水道改修工事	13.9.7	13.10.19	100m	3	第134-2,3次調査
16	竹川字南裏247	A	田所 潔	浄化槽設置	13.9.20	13.11.16	1基	4	
17	斎宮字牛葉地内 斎宮字内山地内	B	明和町(上下水道 課)	仮設水道管理設等	13.10.3	13.12.7	203.5m	3	第134-4,5次調査 第134-7,8次調査
18	竹川字花園659-5	A	高槻長郎	住宅建設	13.10.15	13.12.7	54.64㎡	4	第134-13次調査
19	斎宮字柳原、御館地内	C	明和町(斎宮跡課)	道路簡易舗装	13.10.23	13.11.14	230m	1	
20	斎宮字牛葉3396	A	澄野泰久	駐車場舗装	13.10.29	13.12.18	56.05㎡	4	
21	斎宮字鍛冶山2363-2	A	川合和男	塀改修工事等	13.10.30	13.12.7	1基	4	第134-6次調査
22	斎宮字笛川2359	A	丸山照夫	住宅改築	13.11.5	14.1.18	96.89㎡	4	第134-14次調査
23	竹川字南裏249	A	田所敏男	建物除去	13.11.5	13.12.21	3棟	4	
24	斎宮字下園2926-16	A	奥田悦夫	浄化槽設置	13.11.8	13.12.21	1基	4	第134-12次調査
25	斎宮字中西2738	A	山路佳則	住宅改築	13.11.12	14.1.18	134.01㎡	4	第138-3次調査
26	斎宮字下園2937-3(撤去) 斎宮字荊干2861-2(新設)	B	明和町(総務課)	揭示板撤去、新設	13.11.13	13.12.5	1基	1.4	
27	竹川字南裏234	A	島村紀久子	ブロック塀設置	13.11.16	13.12.13	8m	4	
28	竹川字南裏256-3	A	辻 岩男	浄化槽設置	13.11.28	14.1.18	1基	4	
29	竹川字中垣内493-12	B	中部電力株式会社 松阪電力センター	樹木伐採	14.1.9	14.1.28	229本	2	
30	斎宮字塚山3322-2	A	澄野恵子	表土入替	14.1.16	14.3.22	495㎡	2	第134-9次調査
31	斎宮字中西2755	A	岡田あつ子	浄化槽設置	14.1.17	14.3.22	1基	4	
32	竹川字南裏247	A	田所 潔	住宅増築	14.1.18	14.3.1	3.6㎡	4	
33	斎宮字下園2926-16	A	奥田悦夫	カーポート改修	14.1.22	14.2.1	1棟	4	
34	斎宮字東前沖2494-1	A	中川 司	住宅増築	14.1.28	14.3.22	30.0㎡	4	
35	斎宮字篠林3143-1・3	A	大山光彦	住宅建築	14.2.8	14.9.20	113.47㎡	3	138-2次調査
36	竹川字南裏234	A	島村紀久子	建物除去	14.2.18	14.6.21	1棟	4	
37	竹川字南裏249	A	米田 淳	住宅建設	14.3.12	14.5.17	148.9㎡	4	
38	斎宮字牛葉330-1	A	森田 忍	住宅建設	14.3.13	14.5.17	68.52㎡	4	

## 付篇 2 斎宮跡第125-1次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

斎宮は、天皇にかわって伊勢神宮の祭祀に奉仕する斎王の宮殿と、これに関連した事務を取り扱う役所との総称である。この制度は、674年から約660年間にわたって続いた。

斎宮跡の史跡整備が行われるにあたり、当社では当時の自然植生や植栽木、栽培植物などに関して、花粉などの微化石分析を用いた分析調査を継続実施している。今回は、第125-1次調査（明和町教育委員会『史跡斎宮跡平成10年度現状変更緊急発掘調査報告』2000年）で検出された奈良時代の住居跡を対象に花粉分析、植物珪酸体分析を行い、古環境に関する資料の蓄積を行う。

### 1. 試料

試料は、第125-1次調査で検出された竪穴住居SB8101の覆土中から採取された5点（試料番号1～5）である。

### 2. 分析方法

#### (1)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

#### (2)植物珪酸体分析

試料約5gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理（80W, 250KHz, 1分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬（1968）の分類を参考にした。結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

### 3. 結果

#### (1)花粉分析

結果を第5表に示す。いずれの試料からも花粉化石が微量検出されたのみである。花粉化石はいずれも状態が悪く、表面に風化の痕跡が認められる。花粉化石以外として、微粒炭が多く認められる。

#### (2)植物珪酸体分析

結果を第6表、第20図に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認

められる。調査した5試料からは、いずれも珪化組織片（組織内に植物珪酸体が配列した状態で検出されたもの）は認められないが、単体の植物珪酸体は多く検出される。いずれの試料も同様な産状でねタケ亜科の産出が目立ち、ススキ属を含むウシクサ族などが検出される。

#### 4. 考察

植物珪酸体分析組成をみると、機動細胞、短細胞ともにタケ亜科が大部分を占める。タケ亜科珪酸体は、他の珪酸体と比較して生産量が多く、しかも風化にも強いとされている。（近藤，1982；杉山・藤原，1986）。したがって、実際の植生より過大に評価されている可能性があるものの、今回の値は非常に高い。斎宮は古来から「竹の都」とよばれ、周辺には竹のつく神社や地名もあり、タケと関わりが深かったと思われる。おそらく、当時の斎宮周辺には、タケが多く生育していたと推定される。このような組成は、114次調査や116次調査の際に行った植物珪酸体分析でも同様であり、広範囲・長期にわたってタケが生育していたと思われる。

今日、竹林としてよくみられるマダケ、ハチク、モウソウダケのうち、モウソウダケは、近世に入って中国が導入され、日本に広く栽培されるようになったといわれている（星川，1987；岡村，1996）。マダケ、ハチク、ヤダケなどのタケ類は、日本に自生していたものか、渡来したものかははっきりしていない（岡村，1996）。しかし、正倉院御物にこれらを利用した日用品・武器・神具などがあり（斉藤，1977；岡村，1996）、当時資材として多用されていたことが伺われる。奈良・平安時代には、これらのタケ類が栽培されていたことが指摘されており（斉藤，1977）、当時斎宮周辺に植栽されていた可能性は高いと思われる。なお、タケ亜科植物珪酸体を細分化し、

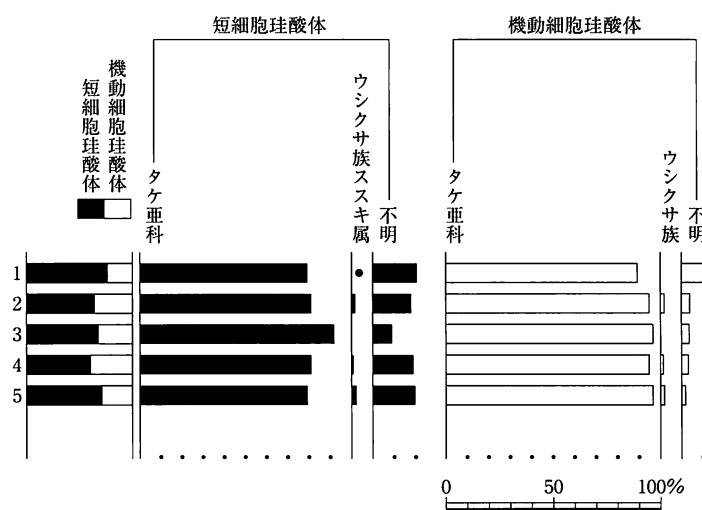
細かな種類を同定する方法は、杉山・藤原（1986）、近藤・大滝（1992）によって試みられている。今回検出されたものは保存状態が悪いため、詳細な同定は困難であったが、今後保存状態が良い試料が得

第5表 花粉分析結果

種類	試料番号	堅穴住居 2				
		1	2	3	4	5
木本花粉						
マキ属		1	—	—	—	—
モミ属		—	—	—	1	—
ツガ属		—	—	1	—	—
マツ属		—	1	1	1	—
スギ属		—	—	—	—	1
コナラ属アカガシ亜属		—	—	—	1	—
草本花粉						
イネ科		—	—	1	—	1
カヤツリグサ科		—	1	—	—	—
オミナエシ属		3	—	—	—	2
ヨモギ属		—	2	—	4	—
キク亜科		1	—	—	—	1
シダ類孢子						
他のシダ類孢子		—	—	—	2	—
合計						
総花粉・孢子数		5	4	3	9	5

第6表 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	堅穴住居 2				
		1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体						
タケ亜科		308	175	216	206	210
ウシクサ族ススキ属		1	3	—	2	5
不明キビ型		40	23	11	25	28
不明ヒゲシバ型		22	5	5	12	9
不明ダンテク型		18	11	3	10	14
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
タケ亜科		104	118	108	144	105
ウシクサ族		—	2	—	2	2
不明		13	5	4	5	2
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体		389	217	235	255	266
イネ科葉身機動細胞珪酸体		117	125	112	151	109
総計		506	342	347	406	375



第20図 堅穴住居SB8101の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類を示す。



られた場合には、これらの報文を参考に細分を行いたい。これによって、植栽されていた種類について詳細な情報を得ることができるかも知れない。

一方、花粉化石はほとんど検出されず、微量みられる花粉化石すべてに風化の痕跡が認められる。花粉化石は好氣的状況下での風化に弱いことから（中村，1967）、大部分が消失したと考えられる。なお、花粉分析の残渣中には図版で示すように、微細な炭化物（微粒炭）が多く認められた。微粒炭の成因は野焼きなどの人間活動に深く関わっているとされ（山野井，1996など）、これらの形状から母植物を推定する試みも行われている（小椋，1999；2000；2001）。おそらく、今回認められた微粒炭も当時の生業に伴うものであると考えられる。現在のところ、土壌中の微粒炭から母植物を正確に推定できることは難しいが、今回検出された微細で縦長なものは、山野井（2000）や小椋（2000；2001）の形態の形態記載と比較するとねススキなどのイネ科を燃焼したときにできる微粒炭に近いように思える。

## 引用文献

- 星川清親（1987）栽培植物の起源と伝播．311p.，二宮書店．
- 近藤鍊三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般C）研究成果報告書，32p.．
- 近藤鍊三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64．
- 近藤鍊三・大滝美代子（1992）タケ亜科植物葉身の短細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，36，p.23-43．
- 中村 純（1967）花粉分析．232p.，古今書院．
- 小椋純一（1999）微粒炭の形態と母材植生との関係(1)，京都精華大学紀要，17，p.53-69．
- 小椋純一（2000）微粒炭の形態と母材植生との関係(2)，京都精華大学紀要，19，p.45-64．
- 小椋純一（2001）微粒炭の形態と母材植生との関係(3)，京都精華大学紀要，20，p.32-50．
- 岡村はた（1996）タケ．「植物の世界」、11，p.13-20，朝日新聞社．
- 斎藤正二（1977）日本古典文学にみる竹．「世界の植物」，85，p.2141，朝日新聞社．
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—．考古学と自然科学，19，p.69-84．
- 山野井 徹（1996）黒土の成因に関する地質学的検討．地質学雑誌，102，p.526-544．

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきさいくうあと へいせい13ねんどげんじょうへんこうきんきゅうはつかつちょうさほうこく							
書名	史跡 斎宮跡 平成13年度現状変更緊急発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県多気郡明和町斎宮跡埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	19							
編著者名	中野敦夫 駒田利治 泉雄二 伊藤裕偉 水橋公恵							
編集機関	明和町（斎宮跡課）							
所在地	〒515-0332 三重県多気郡明和町馬之上945 TEL 0596(52)7126							
発行年月日	2003年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいくうあと 斎宮跡	たきぐんめいわちょう 多気郡明和町 さいくう なげかわ 斎宮・竹川	24442	210	34度 31分 35秒 ～ 34度 32分 30秒	136度 36分 16秒 ～ 136度 37分 37秒	20010401 ～ 20020330	全14件 合計 439.5㎡	史跡現状 変更に伴 う緊急発 掘調査  (第134-1 ～14次調 査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
斎宮跡	官衙	奈良 平安 鎌倉 近世以降	竪穴住居 掘立柱建物 ピット・土坑 溝 溝		土師器・須恵器 緑釉陶器 陶器（山茶碗）		第134-8次 第134-9次  第134-8次ほか 第134-6次 第134-9次	

# 图 版



第134-1次 調査区全景（北から）



第134-4次 調査区全景（南から）

図版 2

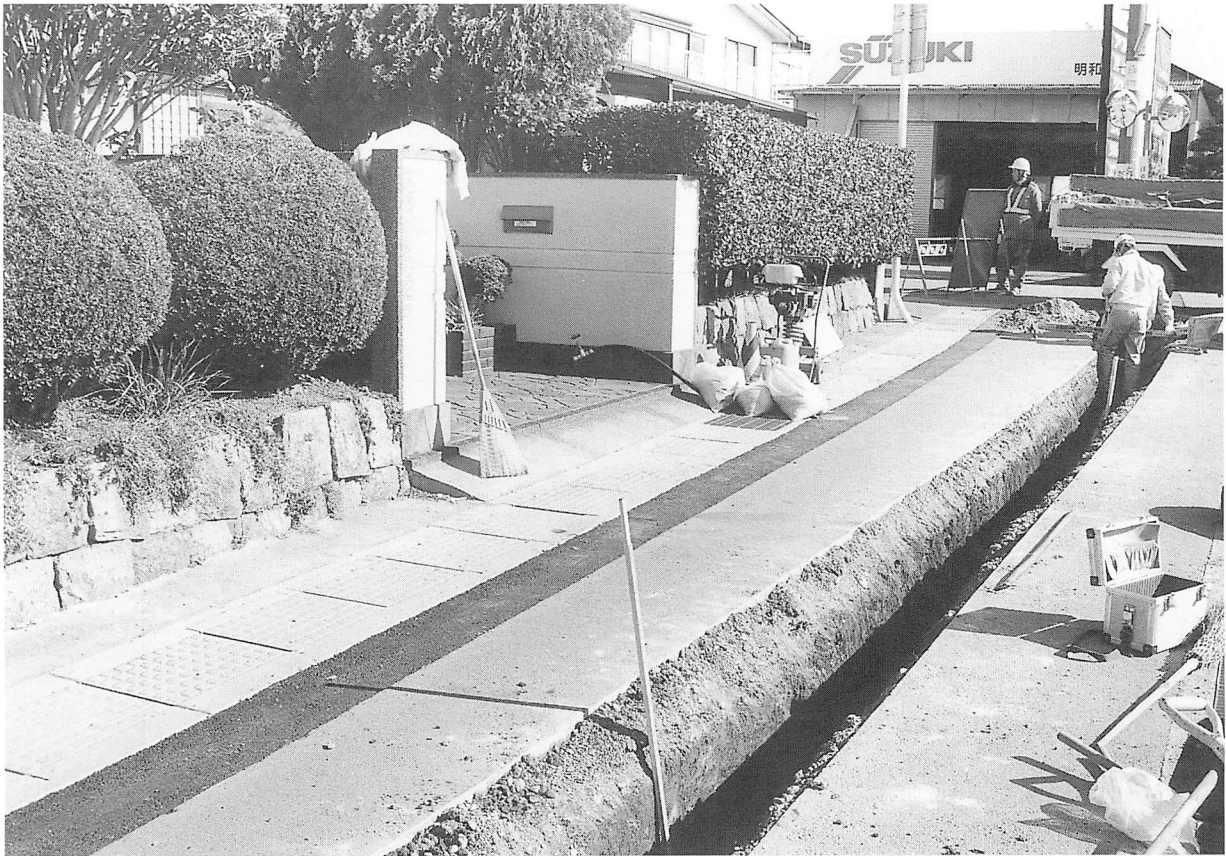


第134-6次 調査区全景（南から）



第134-7次 調査区風景（南から）





第134-8次 調査区風景（西から）



第134-8次 調査区近景（西から）



図版 4



第134-8次 SH8479付近（西から）



第134-8次 SH8479西壁部分（南から）



第134-9次 全景（南から）



第134-9次 SH8490付近（西から）





第134-9次 SA8493ほか (南から)



第134-9次 SB8494ほか (北から)



第134-10次 調査区全景（東から）

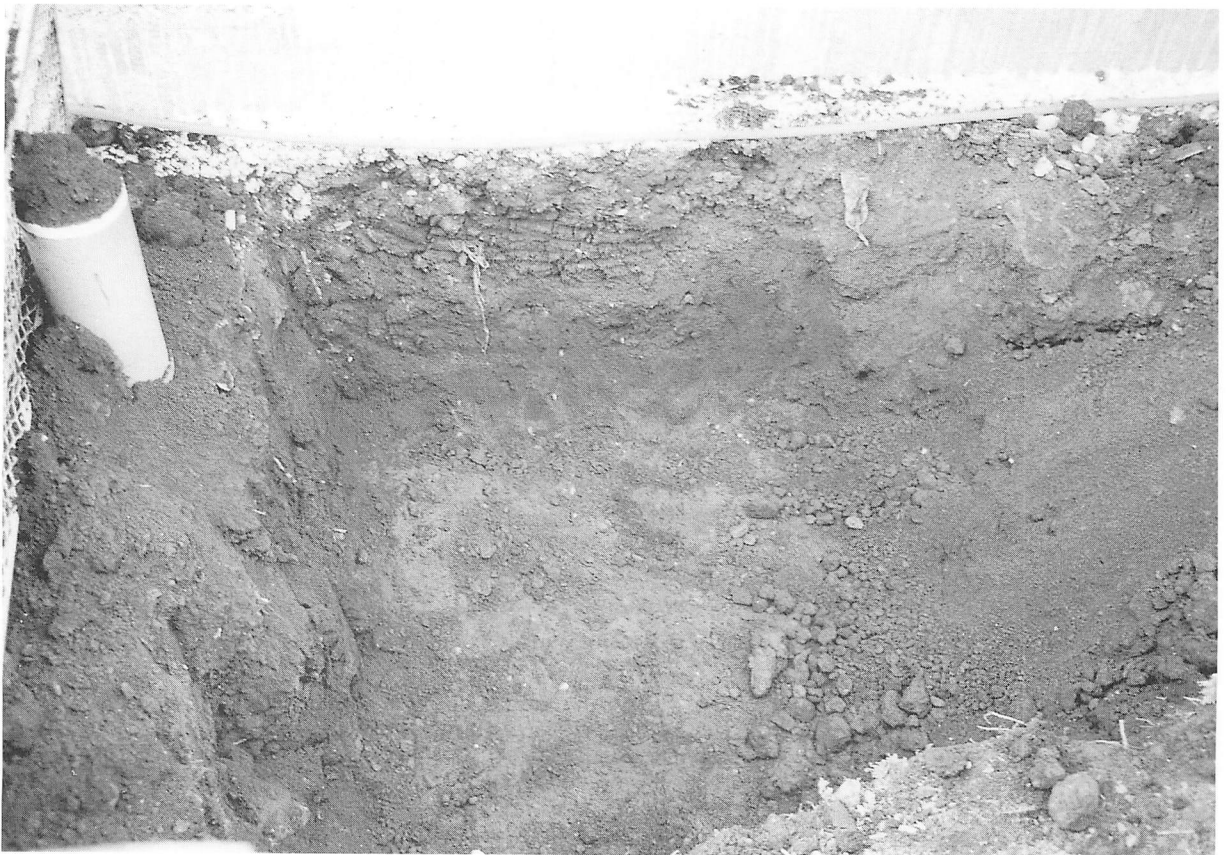


第134-11次 調査区の状況（西から）

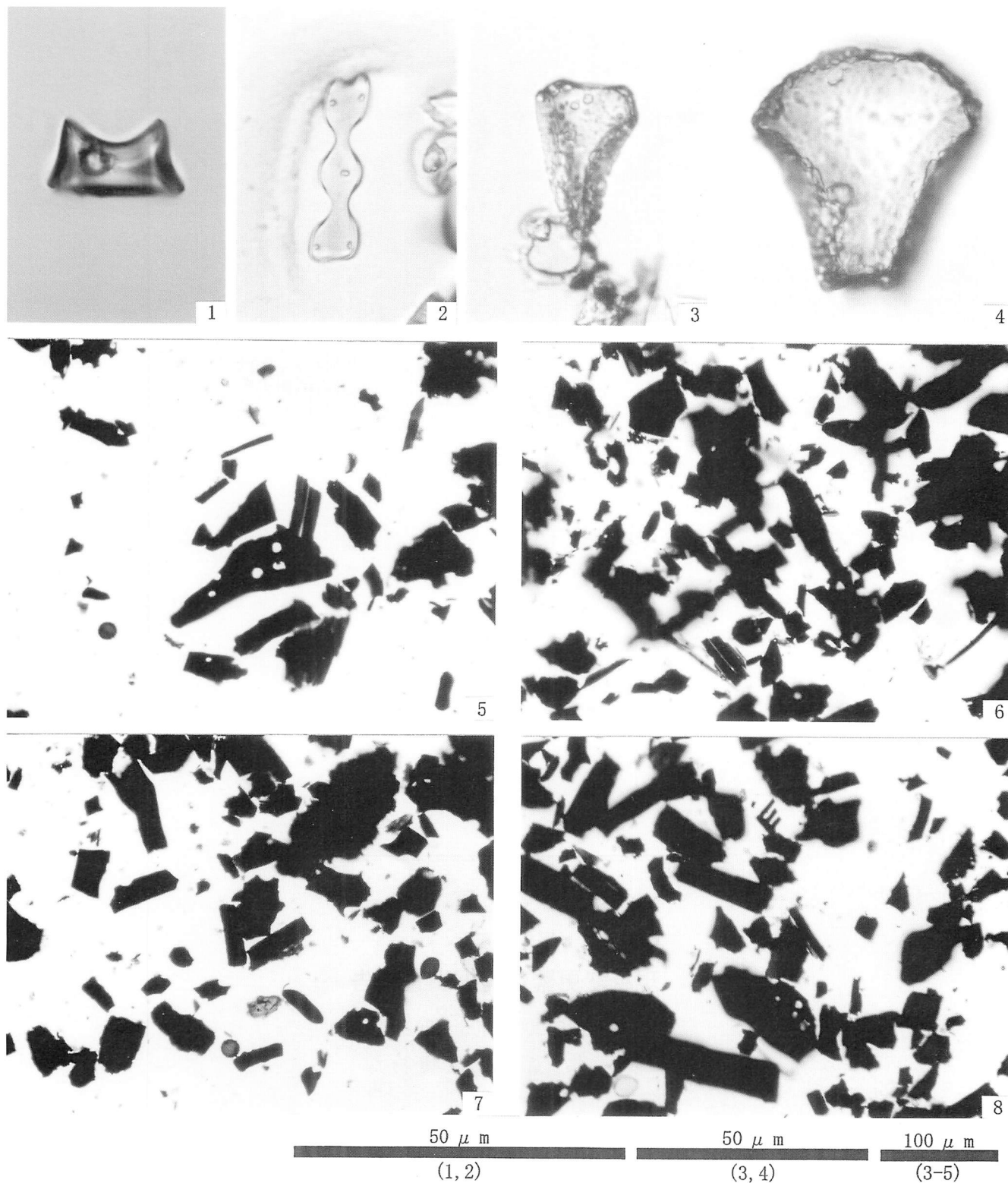




第134-12次 調査区全景（北から）



第134-14次 調査区全景（南から）



- |                               |                               |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1. タケ亜科短細胞珪酸体(試料番号 5)         | 2. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号 5)         |
| 3. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号 5)       | 4. タケ亜科機動細胞珪酸体(試料番号 5)        |
| 5. 花粉化石分析プレパラート内の状況写真(試料番号 2) | 6. 花粉化石分析プレパラート内の状況写真(試料番号 3) |
| 7. 花粉化石分析プレパラート内の状況写真(試料番号 4) | 8. 花粉化石分析プレパラート内の状況写真(試料番号 5) |

---

---

史 跡 齋 宮 跡

平成13年度

現状変更緊急発掘調査報告

平成15(2003)年3月26日

編 集 齋宮歴史博物館  
明 和 町

発 行 明 和 町

印 刷 光出版印刷株式会社

---

---



